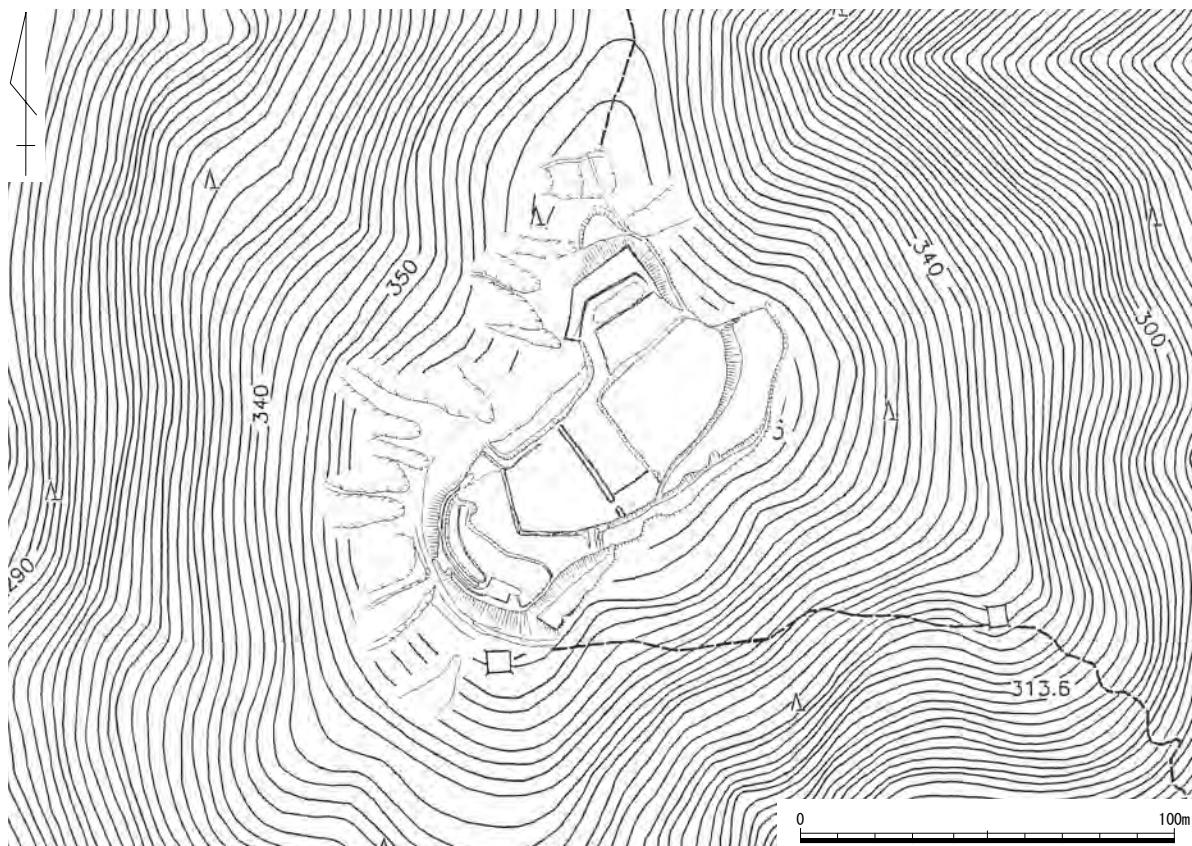


立地 総社平野の北縁山塊の山頂に立地する。麓との比高は340 mあり、南に総社平野を一望できる。

概要 山頂部を大規模に削平し、約100 m×50 mの範囲に曲輪を配置している。概して、曲輪の平面形は方形を呈し、輪郭は直線的で、石垣が多く残る。中心となる曲輪は約70×30 mの広さがあり、約50cmの段差によって北西と南西に区画される。南西側の区画にはさらに、周囲に土留めとして石を並べた幅約2 m、高さ約50cmの土塁（石塁か）があり、約10×30 mの空間を造っている。北西側の区画の北西側には広さ約25 m四方の区画を設け、その北～西縁に、幅3～5 mで、周囲に高さ約1.5 mの石垣を築いた曲輪を造成し、尾根鞍部方向を固めている。南西側の区画の西・南縁にも石垣を築いており、その高さは約1.5～2 mを測る。この石垣の外側（西～南側）にも約35×20 mの区画があり、西～南縁に食い違い虎口を持つ土塁を設けている。この土塁は縁部を掘り残して窪地を掘削して造った土塁であり、高さは掘削の深さと同じで約0.2～2 mある。さらに、土塁から3 mほど斜面下方に深さ約1～1.5 mの横堀がある。その横堀を西から北へたどると犬走りとなり、尾根鞍部まで続く。横堀から犬走りにかけての下方斜面には大小の溝状地形が観察されるが、自然の崩れによるものと考えられる。

文献・伝承 『古戦場備中府志』は、中島村「経山城」として、城主中島大炊介と記す。『備中誌』は経山城築城を大内義隆とし、その後、小早川隆景の城代中嶋大炊介元行とする。『中国兵乱記』は、天文12（1543）年に赤松勢、元亀2（1571）年に尼子勢との合戦を伝えている。（物部）



第287図 経山城跡縄張り図（1/2,000） 作図：島崎 東